

発達の観点からみた
女性の親との心理的距離と性格特性の関係 (2)
- 「依存」か「服従」か、相関関係からの検討 -

三 田 英 二

**Relation between psychological distance
and Personality trait with women's parents
from the viewpoint concerning development.**

MITA Eiji

本研究は、青年期後期群 90 名 (平均年齢 19.18 歳, SD=.76, range18-21)、成人期前期群 80 名 (平均年齢 25.98 歳, SD=2.09, range22-30) を調査対象者として行っている、女性の自己形成を検討する一環として、親との心理的な距離と性格特性の関係を検討した前研究 (三田、2010) を更に詳細に検討するため行われた。

性格特性を測定する用具として、市販されている矢田部ギルフォード性格検査 (YG 検査) を用いた。

親との心理的な距離を測定する用具として、加藤・高木 (1980) が作成した独立意識尺度を三田 (2003) が因子分析した結果のうち、第 2 因子「親への依存」因子と第 5 因子「親への服従」因子の項目を用いた。青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の 4 群に分け、前研究 (三田、2010) では、各群の YG 検査下位因子得点について比較検討を行った。本研究では、「親への依存」因子と「親への服従」因子それぞれ各群別々に YG 検査下位因子と相関分析を行った。

その結果、親への「依存」よりも、親への「服従」の方が、性格特性との関連は強かった。また、親への「依存」・「服従」に対する自覚が、自己形成上重要なことを示した。

・問題

本研究は、女性の自己形成を検討する一環として行っている。青年期から成人期への移行過程を検討することで、女性の自己形成過程を、より詳細に検討できると考えている。

本研究と同一の群分け（詳細後述）で行った研究において、Self-Esteem（三田、2008）は、青年期後期段階では、4群間に差異はなく、YG 検査（三田、2010）においても YG 検査の 12 下位因子中、4群間で差異が見られたのは、N（神経質）因子だけで、4群間で差異が見られるようになるのは、Self-Esteem、YG 検査下位因子とも成人期前期段階になってからであった。つまり、成人社会へとデビューするまでは（青年期後期段階までは）、親との心理的な距離がどのような状況であっても、Self-Esteem と性格特性は、同等な状態にあることを示した。差異が見られるようになってくるのは、成人社会にデビューしていく過程で、あるいは、デビューした後に、親との心理的な距離によって、自己形成過程が大きく異なってくることを示した。

このことから、女性の自己形成を検討するためには、青年期だけ（あるいは、青年期まで）を調査対象とするだけでなく、青年期後期段階から成人期前期段階に至る移行期での変化を検討した方が、女性の自己形成を検討するためには、有効だと考える。

また、本研究は、女性の自己形成を検討する一環として、性格特性を取り上げた前研究（三田、2010）で得られた知見を、更に詳細に分析するため行うものである。

一般的に、心理的な発達過程は「依存から自立」という方向性があることは多くの研究者によって、指摘されているところである。しかし、心理的な「自立」といっても、一義的ではなく、様々な自立の姿が考えられる。また、心理的な「依存」についても、否定的な見解から、肯定的な見解まで、そのとらえ方は一様ではない。否定的な見解として、例えば、Moore,B.E.と Fine,B.D.（1990/1995）は「（依存とは）充足や適応を目的として他者に頼ろうとする傾向のこと。発達の途上では、依存も一定の効用をもち、また欲求のひとつとしても体験される。しかしふつう、依存という言葉は、年齢不相応な仕方で、過度に相手に頼ろうとする欲求を意味し、ある種の非難や軽蔑の意味をもつことが多い。」（訳書：Pp.11-12.）と述べている。肯定的な見解としては、例えば、Fairbairn,W.R.D.（1952/1995）は、乳児的な依存関係から、移行期を経て、成熟した依存関係を持つことが、健全な心理的な発達過程であることを指摘している（訳書：p.90 など）。

つまり、一口で「依存」といっても、健全な「依存」から不健全な「依存」まで、その様相は様々であることを示していると考えられる。

しかし、本研究は、依存性が肯定的なものか否定的なものかを検討するものではない。上述のように、親との心理的な距離の違いにより、自己形成過程が異なっている。本研究では、親への「依存」を、親との心理的な距離を測定するひとつの指標として、取り上げている。つまり、「高依存」は、親との心理的な距離が近く、「低依存」は、親との心理的な距離が離れている、ととらえている。

親との心理的な距離と自己形成との関係を検討するため、加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果から、「親への依存」因子と「親への服従」因子を用いて、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群に分け、前述のように、Self-Esteem（以下、SE と略記、三田、2008）性格特性（三田、2010）について検討してきた。

この結果、青年期後期段階では、前述のように、SE、性格特性とも4群間で大きな差異はなかったが、成人期前期段階になると、親との心理的距離が最も離れていると推定される「低依存・低服従」群だけがSEを有意に向上させ、性格特性も大きく変化させていた。ここで、「親への依存」因子、「親への服従」因子のどちらが性格特性と関係しているのか疑問に感じた。

そこで、本研究では、前研究(三田、2010)で感じた疑問を解き明かすため、各群ごと「親への依存」因子・「親への服従」因子別々に、YG検査下位因子との相関分析をすることで、親への「依存」、親への「服従」が、性格特性とどのような関係にあるかを検討することを目的として行うものである。

．方法

1．調査対象者

本研究は、継続的に行っているものである。分析対象のデータは、この一連の分析を始めた当初(三田、2003)のものである。参考までに調査対象者について記しておく。

青年期後期段階の女性の調査対象者(以下、青年期後期群)90名(平均年齢19.18歳、SD=.76, range18-21)。成人期前期段階の女性の調査対象者(以下、成人期前期群)80名(平均年齢25.98歳, SD=2.09, range22-30)とした。なお、欠損値があるデータは今回の分析から除外しているため、下記(Table 1)に示す各群の人数と一致はしていない。

青年期後期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した(回収率60%)。

2．調査用具

(1) 親との心理的な距離の測定およびグループ分け

親との心理的な距離の測定についても、前研究(三田、2008)と同一であるが、参考までに記載する。

加藤・高木(1980)が作成した独立意識尺度を三田(2003)が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」(項目4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 35, 36)、第2因子「親への依存」(項目20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 33)、第3因子「時間的展望の拡散」(項目3, 13, 14)、第4因子「反抗期心理」(項目28, 30, 31, 37)、第5因子「自信の欠如による親への服従(以下「親への服従」と略記)」(項目17, 18, 26, 29, 34)の5因が抽出されている(付録1参照)。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件法により、回答を求め、「全く自分にあてはまる」を5点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで4, 3, 2, 1点として処理を行った。

なお、親に関係する項目への回答にあたっては、特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず、回答者の判断に任せた。青年期後期群での調査において、調査対象者からは、この点に関する質問は全くなかった(成人期前期群では郵送による調査のため、この点に関しては不明である)。

親との心理的な距離を測定する項目として、このうち、第2因子「親への依存」因子と

第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。「親への依存」因子得点の理論上の range は、8点から40点となる。「親への服従」因子得点の理論上の range は、5点から25点となる。中央値は「親への依存」因子で、青年期後期群24点、成人期前期群25点、「親への服従」因子で、青年期後期群12点、成人期前期群11点となった。

青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、「高依存群・低依存群」、「高服従群・低服従群」に分け、分析用に更にそれをクロスさせ、「高依存・高服従」群、「高依存・低服従」群、「低依存・高服従」群、「低依存・低服従」群の4群に分けた。その内訳を Table 1 に示す。

Table 1 各群の人数

青年期後期群	n	成人期前期群	n
高依存・高服従群	20	高依存・高服従群	24
高依存・低服従群	18	高依存・低服従群	15
低依存・高服従群	18	低依存・高服従群	9
低依存・低服従群	27	低依存・低服従群	29
合計	83	合計	77

(2) 性格特性の測定

市販されている矢田部ギルフォード性格検査(以下、YG検査)を用いた。YG検査は、12の性格特性(下位因子、詳細は、付録2を参照されたい)を測定するよう作成されている。下位因子得点の理論上の range は、0点~20点である。得点が高い方が、その性格特性が強いことになる。

なお、性格特性(下位因子)の解釈に当たっては、辻岡(2000)を参照している。

結果

1. 「親への依存」因子・「親への服従」因子の特徴

「親への依存」因子・「親への服従」因子とYG検査下位因子との全般的な相関分析は、すでに行われている(三田、2004)が、本研究の参考として、改めて記載する。

青年期後期群・成人期前期群別々にYG性格検査の12下位因子との相関分析(Spearmanの相関係数)を行った。すでに発表した結果であるため、この結果は、付録3に示した。結果を示すだけでなく、若干のコメントも記しておく。

青年期後期群では、「親への依存」因子と有意な相関が見られたYG検査下位因子は、Co(協調的-非協調的)因子が5%水準で負の相関を示した。同様に、「親への服従」因子とは、C(気分の変化)因子(5%水準)、I(劣等感)因子(0.5%水準)、N(神経質)因子(0.5%水準)、O(客観的-主観的)因子(5%水準)が各々正の相関、Ag(攻撃性)因子(5%水準)が負の相関を示した(Table付録3-1、3-2)。

このことは、親への「依存」と協調性が関連し、親への「服従」は、情緒的な不安定さ

と攻撃性の低さに関連していることを示している。Ag(攻撃性)因子に関して、辻岡(2000)は、「気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見をよく聞かないなど、攻撃的な性質。この性格は情緒不安定(D・C・I・N)と結合すると社会的不適応を起こす。一方情緒安定と結合すると社会的にも活躍する社会的活動性となる。」(p.7)と述べている。本研究の結果は、Ag(攻撃性)因子は、負の相関を示した。つまり、青年期後期群の親への「服従」は、因子命名の通り、「自信の欠如」と関連していることを示している。親への「依存」は、否定的にはとらえていないと考えられる。親への「依存」は、まだ、「年齢不相応」(Moore,B.E.と Fine,B.D.,1990/1995)と自覚していない段階、あるいは、親への「依存」は、青年期後期段階では、社会的に許容される状態と考えている、と推測される。

成人期前期群では、「親への依存」因子と YG 検査下位因子の C (気分の変化) 因子 (1%水準) I (劣等感) 因子 (5%水準) N (神経質) 因子 (0.5%水準) が有意な正の相関を示し、T (思考的内向 - 外向) 因子 (5%水準) が有意な負の相関を示した。「親への服従」因子とは、D (抑うつ性) 因子 (1%水準) C (気分の変化) 因子 (5%水準) I (劣等感) 因子 (0.1%水準) N (神経質) 因子 (0.5%水準) Co(協調的 - 非協調的) 因子 (5%水準) が、正の相関、G (活動性) 因子 (5%水準) R (のんき) 因子 (0.5%水準) A (服従的 - 支配的) 因子 (0.5%水準) S (社会的内向 - 外向) 因子 (0.1%水準) が負の相関を示した (Table 付録 3 - 3 -、3 - 4)。

このことは、成人期前期群では、親への「依存」も「服従」も否定的にとらえていることを示している。特に、A 因子との相関は、親への「服従」に対する自覚を示していると考えられる。

親への「依存」・「服従」に対し、青年期後期群と成人期前期群では、かなり異なったとらえ方をしていることを示した。Moore,B.E.と Fine,B.D. (1990/1995) の指摘「・・・しかしふつう、依存という言葉は、年齢不相応な仕方で、過度に相手に頼ろうとする欲求を意味し、ある種の非難や軽蔑の意味をもつことが多い。」における「年齢不相応」と自覚する発達段階は、成人期前期段階であり、青年期が終了するまで、「年齢不相応」とは、自覚していないと推測される。

2. 各群ごとの結果

各群において、YG 検査下位因子 (性格特性) と「親への依存」因子・「親への服従」因子が、どのような関連をしているのか検討するため、相関分析 (Spearman の相関係数) を行った。その結果を Table 2 ~ 17 に示す。

Table 2 青年期後期群の高依存・高服従群 (n=20) 「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	-.019	-.182	.097	.045	-.154	.126	.133	-.027	-.192	-.269	-.268	.264
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05

*** . . . p<.01

**** . . . p<.005

***** . . . p<.001

Table 3 青年期後期群の高依存・高服従群 (n=20)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	-.453	-.363	-.123	-.020	-.210	-.153	-.582	.005	-.038	.361	-.040	.126
p	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	***	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

青年期後期群の「高依存・高服従」群では、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との相関関係は見られなかった (Table 2) が、「親への服従」因子と D (抑うつ性) 因子との間に 5% 水準で有意な負の相関が、Ag (攻撃性) 因子との間に 1% 水準の有意な負の相関が見られた (Table 3)。

このことは、親への「服従」と抑うつ性の低さ、攻撃性の低さが関連していることを示している。つまり、親への「服従」と心理的な安定感が関連していることを示した。

Table 4 青年期後期群の高依存・低服従群 (n=18)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.055	-.217	.336	-.117	-.120	-.023	-.174	-.361	-.381	.002	-.211	-.417
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 5 青年期後期群の高依存・低服従群 (n=18)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.400	.304	.136	.486	.444	.647	.596	.200	-.302	-.271	-.259	-.319
p	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	****	***	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

青年期後期群の「高依存・低服従」群では、「親への依存」因子と YG 検査の 12 下位因子との間には、有意な相関関係は見られなかった (Table 4) が、「親への服従」因子と YG 検査の N (神経質) 因子、Co (協調的 - 非協調的) 因子、Ag (攻撃的) 因子の 3 つの YG 検査下位因子との間に有意な正の相関が見られた (Table 5)。

このことは、親への「服従」と神経質傾向の強さ、非協調的傾向と攻撃性の高さが関連していることを示している。つまり、親への「服従」と心理的な不安定さが関連していることを示した。

Table 6 青年期後期群の低依存・高服従群 (n=18)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	-.520	-.317	-.416	-.347	-.508	-.436	.239	.178	-.134	.427	-.178	.021
p	**	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 7 青年期後期群の低依存・高服従群 (n=18)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.200	.377	.311	.303	.186	.321	.032	.042	-.004	.106	-.222	-.092
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.								

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

青年期後期群の「低依存・高服従」群では、「親への依存」因子とD（抑うつ性）因子、O（客観的 - 主観的）因子との間に有意な負の相関が見られた（Table 6）。

このことは、抑うつ性の低さや客観的な姿勢が、親への「依存」と関連していることを示している。しかし、「親への服従」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかった（Table 7）。

Table 8 青年期後期群の低依存・低服従群 (n=27)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	-.192	-.174	-.112	-.088	-.143	-.501	-.118	.353	.087	.087	-.023	-.154
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.						

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 9 青年期後期群の低依存・低服従群 (n=27)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.033	-.060	.277	.252	.017	-.126	-.409	.132	-.374	-.166	-.266	-.399
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

青年期後期群の「低依存・低服従」群では、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかった（Table 8）が、「親への服従」因子と Ag（攻撃的）因子、S（社会的内向 - 外向）因子の間に、有意な負の相関が見られた（Table 9）。

このことは、親への服従と攻撃性の低さ、社会的内向との関連を示している。

Table 10 成人期の高依存・高服従群 (n=24)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.279	.595	.280	.364	.277	.072	.244	.020	.283	-.164	.010	-.022
p	n.s.	****	n.s.	n.s.	n.s.							

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 11 成人期の高依存・高服従群 (n=24)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.178	.167	.426	.181	.039	.196	-.276	-.330	-.496	-.256	-.646	-.508
p	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	****	**

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

青年期後期群では見られなかった相関関係 (Table 2) が、成人期前期群では、「親への依存」因子とC (気分の変化) 因子で有意な正の相関を示し (Table 10)、「親への服従」因子とI (劣等感) 因子で正の相関、R (のんき) 因子、A (服従的 - 支配的) 因子、S (社会的内向 - 外向) 因子で負の相関を示した (Table 11)。

このことは、親への「依存」と気分の変動の大きさが関連し、親への「服従」と劣等感の強さ、のんきでないこと、服従的なこと、社会的内向状態になることとの関連を示している。

Table 12 成人期の高依存・低服従群 (n=15)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.268	-.448	-.097	-.022	.434	.444	-.130	.046	-.289	.060	-.150	-.502
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 13 成人期の高依存・低服従群 (n=15)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.213	.518	.650	.520	.188	.114	-.025	-.627	-.115	-.458	-.405	-.237
p	n.a.	**	***	**	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

成人期前期群の「高依存・低服従」群では、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかった (Table 12) が、「親への服従」因子との間に、C (気分の変化) 因子、I (劣等感) 因子、N (神経質) 因子に正の、G (活動性) 因子と負の有意な相関が見られた (Table 13)。

このことは、親への「服従」と「苛立ち」感が関連していること、また、自発性の低下と親への「服従」が関連していることを示している。

Table 14 成人期の低依存・高服従群 (n=9)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	-.500	-.220	-.530	-.417	-.766	-.570	-.034	-.021	.352	.124	.481	.619
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 15 成人期の低依存・高服従群 (n=9)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.740	.443	.506	.607	.285	.316	-.085	-.579	-.562	-.309	-.308	-.613
p	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

成人期前期群の「低依存・高服従」群では、「親への依存」因子とO（客観的 - 主観的）因子が有意な負の相関（Table 14）、「親への服従」因子とD（抑うつ性）因子に有意な正の相関が見られた（Table 15）。

このことは、親への「依存」と客観的な姿勢、親への「服従」と抑うつ性の強さが関係していることを示している。

Table 16 成人期の低依存・低服従群 (n=29)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.065	.077	.037	.194	.255	.013	.022	.076	.079	-.130	.094	.059
p	n.s.	n.s.	n.s.									

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 17 成人期の低依存・低服従群 (n=29)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.057	.054	.008	-.051	-.050	-.115	-.197	-.160	-.123	.118	-.032	-.078
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

成人期前期群の「低依存・低服従」群では、「親への依存」因子、「親への服従」因子ともに YG 検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかった（Table 16,17）。

・考察

各群ごとの考察を行うに先立ち、「高依存」群と「低依存」群において、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係が見られない（青年期後期群では、「高依存・高服従」群（Table 2）、「高依存・低服従」群（Table 4）、「低依存・低服従」群（Table 8）成人期前期群では、「高依存・低服従」群（Table 12）、「低依存・低服従」群（Table 16））ことについての検討から始めたい。

青年期後期群では、全般的には、前述のように、親への「依存」をまだ自覚していない段階かもしれない（Table 付録3 - 1）。しかし、各群ごとでは、親と心理的な距離により、異なる結果を示している。すなわち、「低依存・高服従」群以外は、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に、有意な相関関係が見られなかったことである。

成人期前期群においても「高依存・低服従」群と「低依存・低服従」群で「親への依存」

因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係が見られなかった。

同様に有意な相関関係が見られなかった「高依存」群と「低依存」群では、同一の解釈はできない。「高依存」群と「低依存」群では、異なった解釈が必要であり、その方が妥当性が高く、合理的であると考えられる。

独立意識尺度の作成者の一人でもある高木(2000)は、独立性について「他者からの影響を受けたり、周りの要求に従ったりするのではなく、自分自身の欲求や知覚、判断に従って行動すること」という Vinacke, W. E. (1994) の定義を紹介し、「独立意識とは、自己の独立性の状態についての意識や認識である。」(p.170)と述べている。このため、「低依存」群(特に「低依存・低服従」群)では、親と自他分化がなされている結果として、内的準拠枠としての性格特性が独立し、親との関係から別次元の準拠枠となり、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係が見られないと考えられる。

「高依存」群は、「過度に相手に頼ろうとする欲求」(Moore, B.E. と Fine, B.D., 1990/1995)があり、このため、青年期後期段階までは、出生後からの親への「依存」が継続されており、自他未分化で、親への「依存」が自覚されていない状態、あるいは、社会的に許容される状態と自覚している、と推測される。青年期後期段階までの親への心理的依存は、いわば、乳幼児期と同様に生得的な状態として、継続されていると推測される。親との心理的融合状態が継続され、自分の性格(内的準拠枠)が確立できず、親への「依存」心を「内的準拠枠」としている。結果として、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係を示さない。しかし、成人期前期段階に至ると、親への「依存」は、社会的に許容されないという「自覚」が芽生えたため、「親への依存」因子と YG 性格検査下位因子との相関関係が、若干、見られるようになる。

このように、同様に有意な相関関係が見られない場合の解釈として、親からの独立性が高い場合と依存性が高い場合が考えられる。「親への服従」因子との関係においても同様のことが考えられる。

この観点に基づき、各群ごと検討していきたい。

1. 高依存・高服従群

(1) 青年期後期群

青年期後期群では、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかった。「親への服従」因子との間に、D(抑うつ性)因子(5%水準)、Ag(攻撃性)因子(1%水準)の2因子において、ともに負の有意な相関が見られた(Table 2, 3)。

親への「服従」は、抑うつ性の低さと攻撃性の低さに関係している。親に依存することではなく、親の意見に従うこと(服従すること)と、心理的な安定(抑うつ性の低さと攻撃性の低さ)を図ることが関係している。自らの判断を回避し、心理的な安定感を得ていることを示唆するものと考えられる。「親への服従」因子は、略記している因子名である。もともと「自信の欠如による親への服従」因子である。自信がないために親の意見に従っている様子が推測される。

「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかったこと

から、親への「依存」は、常態化しており、内的準拠枠となるなどの性格特性とも関連しない。もともと心理的な距離が4群中最も近いと考えられる群である。親への「依存」は、青年期後期段階の「高依存・高服従」群では、生得的な状態で社会的に許容されていると感じていることを示す結果と推測される。

(2) 成人期前期群

「親への依存」因子とは、C(気分の変化)因子(0.5%水準)と有意な正の相関を示し、「親への服従」因子とは、I(劣等感)因子(5%水準)と有意な正の相関、R(のんき)因子(5%水準)、A(服従的-支配的)因子(0.5%水準)とS(社会的内向-外向)因子(5%水準)とは有意な負の相関を示した(Table 10,11)。

青年期後期群では見られなかった「親への依存」因子と相関関係を持つ因子が見られた。親への「依存」は、もはや社会的に許容されないと感じていることを示唆している。自他分化が進行し、他者(親)に依存していると自覚できるようになった状態を意味していると考えられる。

この群の成人期前期群では、心理的な動揺(気分の変化)と親への「依存」が関連している。親に心理的な依存をすることで、心理的な安定を求めようとしているのか、あるいは、発達段階的に親への「依存」は、社会的に許容されないと自覚した結果、心理的に動揺しているのか、のいずれかと考えられる。

「親への服従」因子との相関関係を見ると、親への「服従」は、劣等感やのんきではいられないこと、服従していること、社交性が低下していることなど否定的な感情と関連している。また、もともと「高服従」群である。A(服従的-支配的)因子と有意な相関関係を示したことは、親への「服従」を自覚した結果と考えられる。自他(親)分化が進行した結果と考えられる。

「親への依存」因子、「親への服従」因子双方から考えると、親と心理的に近い関係にある状態は、社会通念上、許容されない状態と自覚したためではないだろうか。青年期後期段階と比べたとき、自他分化が進行した状態と考えられる。

2. 高依存・低服従群

(1) 青年期後期群

「高依存・高服従」群同様、「親への依存」因子とは、有意な相関関係は見られず、「親への服従」因子とN(神経質)因子(5%水準)、Co(協調的-非協調的)因子(0.1%水準)、Ag(攻撃性)因子(1%水準)の各因子で有意な正の相関を示した(Table 4,5)。

親への「服従」と神経質傾向の高さ、非協調的な態度、攻撃性の高さが関連している。有意な相関関係が見られたYG検査下位因子は、すべて、情緒的な不安定さを示す因子である。この群は、もともと、親への「服従」が低い傾向にある群である。この群における親への「服従」は、否定的な感情と関連していると考えられる。親への「服従」を拒否している、あるいは、親への「服従」と「苛立ち」感が関連していると推測される。

また、この群でも「親への依存」因子とYG検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかった。親への「服従」は拒否するが、親への「依存」は、社会的に許容される、

当然の状態としていることが推測される。

(2) 成人期前期群

青年期後期群 (Table 4) と同様、「親への依存」因子とは、相関関係は見られなかった。「親への服従」因子との間に、C (気分の変化) 因子 (5%水準)、I (劣等感) 因子 (1%水準)、N (神経質) 因子 (5%水準) で有意な正の相関、G (活動性) 因子 (5%水準) で有意な負の相関を示した (Table 12,13)。

「親への依存」因子と YG 検査下位因子すべてで有意な相関関係を持たなかったことは、この群では、親に「依存」することは、青年期後期段階同様、未だに生得的な状態、社会的に許容される状態、あるいは、親が自分を支えることは当然のこと、という認識を示す結果と推測される。

しかし、「親への服従」因子と YG 検査下位因子との相関は、青年期後期段階と若干異なった結果を示している。気分が動揺する (C (気分の変化) 因子)、劣等感に苛まれる (I (劣等感) 因子)、神経質になる (N (神経質) 因子)、活動性が低下する (G (活動性) 因子) といった、自信が低下した状態と「親への服従」因子とが関連している。前述のように、「親への服従」因子は、もともと、「自信の欠如による親への服従」を略記したものである。成人期前期段階になると、心理的に不安定なときには、外的準拠としての親の存在を認識することを示していると推測される。

青年期後期段階でも、N (神経質) 因子との有意な相関関係が見られるが、その意味しているところは異なっていると考えられる。

3. 低依存・高服従群

(1) 青年期後期群

「高依存・高服従」群や「高依存・低服従」群とは逆に、「親への服従」因子とは、相関関係はなく、「親への依存」因子と D (抑うつ性) 因子 (5%水準)、O (客観的 - 主観的) 因子 (5%水準) に有意な負の相関が見られた (Table 6,7)。

もともと「高服従」群であるが、A (服従的 - 支配的) 因子との有意な相関関係が見られないことから、親への「服従」は自覚されていないと考えられる。

親に「依存」することと内的準拠となる性格特性のうち、情緒的安定を示す YG 検査下位因子との相関関係が認められた。すなわち、親への「依存」は、心理的な安定感と関連している。この群は、もともと、「低依存」群である。否定的な感情と親への「依存」が関連するのではなく、抑うつ性の低さと客観性が親への「依存」と関連した。この群は、親の高圧的な態度から、親に「服従」はするが、親に「依存」はしない、つまり、親との信頼関係がない、という群ではなく、親との親和性が高い群と考えられる。

「親への服従」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関関係は見られなかった。このことは、親との親和性が高く、親からの指示等に従うのは、自信の欠如から親を外的準拠とするのではなく、生得的な状態で、親の指示に従うのは、幼少期から継続されてきているもので、自然な所作・振る舞いになっていることを示唆する結果と考えられる。

(2) 成人期前期群

「親への依存」因子とは、O (客観的 - 主観的) 因子 (5%水準) が有意な負の相関を示し、「親への服従」因子とは、D (抑うつ性) 因子 (5%水準) が有意な正の相関を示した (Table 14,15,27)。

この群では、青年期後期群でも「親への依存」因子とO (客観的 - 主観的) 因子との間に有意な負の相関関係を示している。この群での親への「依存」は、もともと「低依存」であり、成人期前期群の「高依存・高服従」群とは異なり、冷静さ (客観性) と関連している。親との関係を「客観的」に維持していこうとする姿勢の反映と考えられる。青年期後期段階と同様、親との親和性を維持するための、親への「依存」と考えられる。

しかし、「親への服従」因子とは、D (抑うつ性) 因子が、有意な正の相関関係を示している。D (抑うつ性) 因子は、悲観的な気分や罪悪感の強さなどを示す因子でもある。青年期後期群では、「親への依存」因子で D (抑うつ性) 因子と有意な負の相関関係を示し、親への「依存」は、心理的な安定と関連すると推測され、「親への服従」因子と YG 検査下位因子とは、青年期後期群では、全く相関関係が見られなかった (Table 6, 7)。

しかし、成人期前期段階になると、親への「服従」は、嫌悪感のような感情と多少関連してくることを示す結果と考えられる。親との親和性を保ちながらも、判断は自ら行いたいという自他分化の反映と推測される。あるいは、親に「服従」することは、社会的に許容されないと自覚した結果とも考えられる。

4. 低依存・低服従群

(1) 青年期後期群

「親への依存」因子とは相関関係はなく、「親への服従」因子との間に、Ag (攻撃性) 因子 (5%水準) と S (社会的内向 - 外向) 因子 (5%水準) に、ともに有意な負の相関が認められた (Table 8, 9)。

この群は、親からの心理的な距離が最も離れている群である。「親への依存」因子と YG 検査下位因子との間に有意な相関は見られなかったことは、同様に「親への依存」因子と有意な相関関係が見られなかった「高依存・高服従」群とは異なり、親への「依存」は、生得的な状態ではなく、別次元になっているため、有意な相関関係が見られなかったと考えられる。

「親への服従」因子とは、攻撃性と社交性の低下と関係した。親への「服従」は、いわゆる「気弱」な状態と関係していると考えられる。「個」として心理的に自立する最終段階にあると考えられる。

(2) 成人期前期群

「親への依存」因子も「親への服従」因子も YG 検査下位因子と相関関係は見られなかった (Table 16,17)。

前述したように、独立性が高い場合、内的準拠枠が独立しているため、「親への依存」因子・「親への服従」因子と内的準拠枠である YG 検査下位因子との間に有意な相関関係が見られなくなったと考えられる。つまり、自他分化がなされ、親から心理的に分離・独

立しているため、自分の行動を決める内的準拠枠となる性格特性が、親との心理的な関係とは別次元になっていることを示している。すなわち、「個」として心理的に自立した姿を示していると考えられる。

5 . 「親への依存」因子と「親への服従」因子、どちらとの関係が強いのか？

本研究で、「親への依存」因子・「親への服従」因子と YG 検査下位因子との有意な相関を示した数だけ見ると、青年期後期群では、4 群全体で、「親への依存」因子と有意な相関関係を示した YG 検査下位因子は 2 因子、「親への服従」因子とは 7 因子であった。成人期前期群では、同様に、「親への依存」因子では 2 因子、「親への服従」因子では 9 因子であった。有意な相関の数だけで見ると、青年期後期群・成人期前期群とも「親への服従」因子との数が多く、青年期後期群と成人期前期群の間に、大きな差異は見られない。性格形成と関連が強いのは、全般的には、親への「依存」よりも、親への「服従」が優位と考えられる。

6 . 総括的討論

前研究（三田、2010）において、青年期後期段階では、4 群間で性格特性に大きな違いは見られなかった。4 群間で性格特性に差異が見られるのは、成人期前期段階で、成人社会へと移行していく中（あるいは、移行後に）、各群ごと特徴的な性格特性を形成していくと前研究では考えた。

そこで先ず、前研究（三田、2010）において YG 検査下位因子得点が 4 群間で大きな差異を見せなかった青年期後期群から検討していく。

青年期後期群の「高依存・高服従」群と「低依存・低服従」群は、類似した相関関係を示した。すなわち、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との相関関係はなく、「親への服従」因子との相関関係は、Ag（攻撃性）因子が負の相関を示したことが共通している。しかし、Ag（攻撃性）因子以外に、「高依存・高服従」群では、D（抑うつ性）因子が負の相関、「低依存・低服従」群では、S（社会的内向 - 外向）が負の相関を示し、親への「服従」は、この 2 群においても異なると推測された。両群とも自信の低下との関連が考えられる。ただ、「高依存・高服従」群では、D（抑うつ性）因子との相関であるため、他者から分離した自己の内的側面における問題と関連し、「低依存・低服従」群では、S（社会的内向 - 外向）因子との相関であるため、社交場面や対人関係領域などの自己の外面的側面での問題と関連していると考えられる。

親からの心理的な自立が、親との心理的距離を広げていくことと考えれば、「高依存・高服従」群から「低依存・低服従」群への移行が、心理的な自立の方向性となる。つまり、「依存」から「自立」へと向かう過程が、先ず、自己の内面での問題を解決し充実させた上で、その後、対人関係など自己の外側での問題に取り組み、解決した後、心理的な自立を達成する、という方向性を示唆する結果とも考えられる。

「高依存・低服従」群では、「高依存・高服従」群や「低依存・低服従」群とは逆に、Ag（攻撃性）因子は、正の相関関係を示した。この群では、親への「服従」は、何らかの「苛

立ち」感と関連しているものと推測された。「低依存・高服従」群では、「親への服従」因子と YG 検査下位因子との有意な相関関係はなく、「親への依存」因子との相関関係を見ると、親との親和性の高さを推測させるものであった。

このように、青年期後期群の4群間で YG 検査下位因子得点を比較したときに見られなかった、各群の特徴が明らかになった。

続いて、発達的な観点からの検討を試みたい。

「高依存・高服従」群では、「親への依存」因子と YG 検査下位因子との相関関係は、青年期後期群では見られないが、成人期前期群では O（客観的 - 主観的）因子との相関が見られた（Table 2, 10）ことから、青年期後期段階では、親への「依存」を自覚していない（生得的なものとなっている）状態から、成人期への移行期（あるいは、移行後）に徐々に自覚していく方向性があると推測される。

「高依存・低服従」群は、青年期後期群・成人期前期群ともに「親への依存」因子と YG 検査下位因子と有意な相関関係が見られない（Table 4, 12）ことから、青年期後期段階も成人期前期段階も、親への「依存」は、生得的な状態に変化がないものと推測された。しかし、親への「服従」については、発達的な変化が見られた。親への「服従」は、青年期後期群・成人期前期群ともに自覚しているものの、青年期後期群では、親への「服従」は、「苛立ち」感と関連し、成人期前期群では、「自信の欠如」と関連した。親を肯定的にとらえる（成人期前期群）か、否定的にとらえる（青年期後期群）かの差異が生じてくると推測される。

「低依存・高服従」群では、青年期後期群・成人期前期群とも O（客観的 - 主観的）因子と有意な負の相関を示していることから、この群における親への「依存」は、親に対する親和性の表れと考えられた。しかし、親への「服従」は、無自覚な状態から自覚された状態に変化した。成人社会へと移行していく中（あるいは、移行後に）、親への「服従」と抑うつ感が関連するようになっている。

「低依存・低服従」群は、SE（三田、2008）や性格特性（三田、2010）を他の群と比較検討したとき、他の群では見られなかった変化を起こした群であった。すなわち、青年期後期群と成人期前期群の比較において、SE 得点を有意に向上させ（他の群では、見られなかった）、性格特性も YG 検査の 12 下位因子中 7 因子に下位因子得点上有意に変化させていた。青年期後期段階から成人期前期段階に至る中、SE がエネルギー源となり、そのエネルギーを使って、成人社会へと適応するため、内的準拠性（性格特性）を大幅に変化させていったと考えられる。この「低依存・低服従」群においては、青年期後期群・成人期前期群ともに「親への依存」因子と YG 検査下位因子との有意な相関関係は見られていない。親からの心理的な自立度が最も高い群で、親への「依存」が性格特性と関係していないものと考えられた。しかし、親への「服従」は、青年期後期群では、有意な相関が見られる YG 検査下位因子があるが、成人期前期群では、全く見られなくなっている。親との関係を最小限にしながら、心理的なエネルギーを蓄え、それを使って、一気に成人社会へと適応していく、「依存」から「自立」に向かう典型的な発達過程を示している群と考えられる。

7.まとめ

本研究で得られた結果は、親への「依存」よりも、親への「服従」が、自己形成上強い関係を持っていることを示している。このことは、「親への依存」因子・「親への服従」因子と YG 検査下位因子との相関（付録3）を見ても、全般的に「親への服従」因子との有意な相関関係が多いことから推測できることである。

しかしこれは、親への「依存」が全般的に生得的な状態（親が自分を支えてくれていることは、極めて普通のことだ）になっているため、親に「依存」していることが、あまり意識されないとも考えられる。親への「依存」よりも、親への「服従」の方が、自覚しやすいのではないだろうか。親への「服従」を自覚しやすいのは、親への「依存」が生得的なものになっているだけでなく、「親への服従」因子が、「自信の欠如による・・・」ものであるため、自己確立するまで、「自己の否定的な側面を重視する」ということと関連していると考えられる。女性の自己認知の特徴として、遠藤(1992)は、「『絶対になりたくないと思っている人間に現実にかになんていないか』ということの方が自己評価感情を強く支えている」と自己の否定的側面を重視する傾向があることを指摘している。また、「否定的で外面的な側面を重視するが、決して自己否定しているわけではない。」という指摘（三田、1994,1996,1999）もある。

「高依存」群においては、「高依存・高服従」群の成人期前期群で示された、「親への依存」因子と YG 検査の C（気分の変化）因子の有意な正の相関（Table 10）や、「高服従」群においては、成人期前期群での「低依存・高服従」群における「親への服従」因子と D（抑うつ性）因子の有意な正の相関（Table 15）のように、親への「依存」・「服従」を自覚することも重要な要因と考えられた。

つまり、親への「依存」・「服従」を先ず自覚し、そこから脱却していくことが、心理的な自立に向かう過程になっているのではないだろうか。

女子青年の親子関係について、浴野（1994）は、ブロス（Bloss,P.）の「第2の分離・個体化」を紹介する中で、「18 から 22 歳の「個体化期」になると...(中略)...心理的な離乳もかなり進み、親への嫌悪感や否定感へのこだわりも薄れて、肯定的な評価へと変化してくる。」(p.122)と指摘している。

「反抗」的な態度を取り、親と「対立」することで、自他分化を目指すのではなく、親を肯定的に評価する中、親に対する「依存」や「服従」を自覚し、心理的な自立を図っているのではないだろうか。成人期前期群での4群全てに、このような傾向が見られている。青年期後期群で、親への「服従」に対して「反発」を示した「高依存・低服従」群においても、成人期前期群の「親への服従」因子と YG 検査下位因子との相関関係から「対立」を示すような相関関係は認められないことから、このことは、指摘できると考える。

なお、本研究は、女性を対象とした調査を基に考察しているものである。上記考察は、男性との比較を行って、女性との自己形成の特徴であるとするには、更なる検討が必要だと考えている。

< 参考・引用文献 >

- ・浴野雅子 1994 女子青年の親子関係 岡本祐子・松下美知子(編)女性のためのライフ サイクル心理学 福村出版 118-131.
- ・遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係 - 重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 - 教育心理学研究, **40**, 157-163 .
- ・Fairbairn,R 1952 Psychoanalytic studies of the personality. 山口泰司(訳) 1995 人格の精神分析 講談社学術文庫
- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, **28**, 336-340 .
- ・三田英二 1994 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究 - 女子青年を被験者として - 関西学院大学文学部教育学科研究年報, **20**, 1-6.
- ・三田英二 1996 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究() - 女子青年の肯定的自己認知についての検討 - 臨床教育心理学研究, **22**, 9-12.
- ・三田英二 1999 重視される自己の諸側面と性格特性に関する一研究() - 女子青年の否定的自己認知についての検討 - 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **12-2**, 85-91.
- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達, 青年心理学研究, **15**, 1-15 .
- ・三田英二 2004 性格特性と女性の独立意識の関係(1) - 青年期と成人期前期との比較 - . 日本パーソナリティ心理学会, 第13回大会発表論文集, 154-155.
- ・三田英二 2008 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と Self-Esteem の関係, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, **21**, 37-48 .
- ・三田英二 2010 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と性格特性の関係, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 24-W-2 , 1-22.
- ・Moore,B.E. & Fine,B.D.(Ed.) 1990 Psychoanalytic Terms & Concepts. 福島章(監訳)1995 アメリカ精神分析学会精神分析事典 新曜社 「依存」の項目 (Pp.11-12.)
- ・高木秀明 2000 独立意識 久世敏雄・齋藤耕二(監修)青年心理学事典 福村出版 2000
- ・辻岡美延 2000 新性格検査法 - YG 性格検査 応用・研究手引き - 日本心理テスト研究所株式会社
- ・Vinacke ,W .E .1994 Independent personalities .In Corsini ,R .J .(Ed .),Encyclopedia of psychology (2nd ed .), Vol . 2 . John Wiley & Sons . 222 - 223 .

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）
（三田，2003 を一部改変）

		共通性
6 . 人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。	.740 -.014 -.031 .036 -.056	.553
8 . まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712 .046 .016 .294 -.109	.608
5 . 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699 .008 -.257 -.077 .038	.562
36 . どうしたらよいか、自分で決まることが多い。	-.661 .139 .276 .278 .275	.686
4 . 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625 -.125 .026 -.135 -.059	.429
35 . 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	-.585 .049 .043 .203 .237	.443
7 . 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583 .227 -.345 .115 .108	.535
10 . 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570 .190 .222 -.111 .262	.491
9 . 小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519 .026 .186 .120 .216	.366
22 . つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭を浮かぶ。	-.035 .831 .051 .002 .059	.698
20 . 親といればそれで何となく安心できる。	-.060 .795 .148 -.067 .021	.662
24 . 親は自分の心の支えである。	.014 .786 .014 .030 .018	.620
23 . できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014 .783 .026 -.056 .057	.620
21 . 困った時は親に頼りたくなる。	-.141 .714 .149 .010 -.025	.553
25 . 何かする時は、親にまかせてもらいたい。	-.049 .653 -.078 .260 .312	.600
33 . 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にならない。	-.143 -.645 .048 .259 .160	.531
27 . 親に何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073 .543 -.086 .256 .382	.519
14 . 将来、どんな職業に就いたらよいかわからない。	.015 .062 .857 .028 .126	.755
13 . 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194 -.005 .758 .150 -.010	.635
3 . 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324 -.121 -.687 -.023 -.159	.618
31 . 両親に反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067 .177 .064 .698 -.180	.560
30 . 親や先生のいうことはたとえ正しくても反対したくなる。	-.010 -.030 .063 .691 -.098	.492
28 . 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113 -.325 .110 .575 -.031	.461
37 . いつでも相手になってくれる友達ほしい。	-.290 .113 -.047 .531 .066	.385
18 . 親にさからえないで、言うとおりにしてほしい。	-.124 .025 .141 -.033 .748	.597
29 . 親の言うことは素直に従っている。	.007 .295 .029 -.329 .637	.602
26 . 自分で決まるときは、親の意見に従うようにしている。	-.065 .469 .035 .153 .543	.544
34 . 親に対して自分の意見を主張したがるが、自信を持ってない。	-.267 -.300 .031 .213 .526	.484
17 . たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひげを感じる。	.279 .003 -.110 .037 -.517	.359

ことばなし						
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(かまんしたり、調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひきめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
	二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83
	寄与率(%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9
		.850	.876	.809	.619	.680

付録2 YG 検査の下位因子

記号	解釈基準
D	抑うつ性
C	気分の変化
I	劣等感
N	神経質
O	客観的 - 主観的
Co	協調的 - 非協調的
Ag	攻撃性
G	活動性
R	のんき
T	思考的内向 - 外向
A	服従的 - 支配的
S	社会的内向 - 外向

付録3 青年期後期群・成人期前期群別の全体での相関

Table 付録3 - 1 青年期後期群 (n=83)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	-.088	-.118	.066	.020	-.103	-.228	-.066	.046	.007	.062	-.146	-.129
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 付録3 - 2 青年期後期群 (n=83)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.195	.256	.311	.329	.269	.164	-.232	-.061	-.195	-.114	-.157	-.131
p	n.s.	**	****	****	**	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 付録3 - 3 成人期前期群 (n=77)「親への依存」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.186	.312	.286	.345	.207	.184	.118	-.091	.109	-.232	-.151	-.175
p	n.s.	***	**	****	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

Table 付録3 - 4 成人期前期群 (n=77)「親への服従」因子との相関

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
r	.301	.226	.440	.374	.067	.262	-.128	-.268	-.334	-.158	-.350	-.422
p	***	**	*****	****	n.s.	**	n.s.	**	****	n.s.	****	*****

** . . . p<.05 *** . . . p<.01 **** . . . p<.005 ***** . . . p<.001

(2012年7月18日 受理)